

## 春琴抄にみる谷崎潤一郎作品中の自己憐憫

長島 理沙

マゾヒスト文学、悪魔文学、谷崎の作品はその特有の視点・描写からよくそう評される。先行研究では作品主人公と谷崎自身を結びつけて、谷崎の生活が描かれているというものまである。作者と物語はその世界が全く違うものであり、同一視されてはならないにも関わらずである。

今回小論文に取り上げる『春琴抄』では谷崎自身でない男性主人公の自己憐憫というフィルターの裏にある女性の哀しみについて考えていきたい。

春琴抄には我が儘で気難しい琴の名手、春琴とその奉公人佐助が登場してくる。「されば両親も琴女を視ること掌中の珠の如く、五人の兄妹達に超えて唯りこの子を寵愛するに、琴女九歳の時不幸にして眼疾を得、幾つもなくして遂に全く両目の明を失ひければ、父母の悲嘆大方ならず、母は我が子の不憫さに天を恨み人を憎みて一時狂わせるが如くなりき。春琴これより舞技を断念して専ら琴三味絃の稽古を励み、糸竹の道を志すに至りぬ」はじめ春琴は美しく描かれる。盲目であるからこそ自身の美貌に絶対的な自信を持ち、周りにも自分中心に接していく。特に奉公人の佐助に対しては他人以上に傲慢に振る舞い、佐助においても春琴の傲慢がより一層深められるよう奉公する。

ここに谷崎作品がマゾヒスト文学と言われる要因がある。佐助はあたかも自分がより可哀想な報われない状況に陥るよう、春琴の傲慢に従っていく。春琴に与えられる苦痛を窓口として自分の自己憐憫世界に浸るようすはマゾヒストというよりむしろ、ナルシストである。周囲に憐憫の眼差しで見られることはもちろん、

それよりも佐助は自分が可哀想とすることが重要なのである。偶然にも佐助がその願望を最大限に最高の状況で実行できる機会が与えられる。

「賊は予め、台所に忍び込んで火を起し湯を沸かした後、その鉄瓶を提げて伏戸に侵入し鉄瓶の口を春琴の頭の上に傾け、真正面に熱湯を注ぎかけたのであると云う。最初からそれが目的だった。(中略)その夜春琴は全く気を失い、翌朝に至って正気付いたが焼け爛れた皮膚が乾き切るまでに2箇月以上を要した中々の重傷だったのである。」春琴は彼女の存在の中心意義であった美貌をこの事件でなくしてしまふ。

作中においても一応の犯人探しはするが、結局あやふやなままで分からず終いとなる。ここでは犯人や犯人の動機は重要ではない。醜くなった春琴の事件を受けて、佐助がどのように行動するかが重要なのである。

「或る朝早く佐助は女中部屋から下女の使う鏡台と縫針戸を密かに持ってきて寝室の上に端座し鏡を見ながら我が眼の中へ針を突き刺した。針を刺したら眼が見えぬようになると云う智識があった訳ではない。成るべく苦痛の少ない手軽な方法で盲目になろうと思ひ試みに針を以て左の黒眼を突いてみた。黒眼を狙って突き入れるのは難しいようだけれども、白眼の所は堅くて針が入らないが、黒眼は柔らかい。二三度突くと巧工合にづぶと二分入ったと思ったら、忽ち眼球が白濁し、視力が失せていくのが分かった。出血も発熱もなかった。痛みも殆ど感じなかった。此れ水晶体の組織を破ったので、外傷性の白内障を起こしたものと察せら

れる。佐助は次に同じ方法を右の眼に施し、瞬時にして両眼を潰した。尤も直後はまだぼんやりと物の形なども見えていたのが十日程の間に完全に見えなくなると云う。」佐助は醜い春琴を見ないように、彼女の意向に十分以上に沿って自らの眼を潰した。春琴を思って行動する佐助は胸が熱くなるほど従順な奉公人である。しかし、彼が自ら眼を潰す際の描写はどこか嬉々としている様子が伺える。少し考えてみると佐助は自ら盲目になる必要は全くない。それどころか盲目で顔と心に怪我を負った主人を助けるためにはむしろ盲目であってはならない。

佐助の自虐行為は自分の記憶の中の春琴を美しいまま留めておくための手段にほかならない。さらに自虐行為によって可哀想な自分を最高の機会に演出し、自己憐憫にどっぷりと浸ることができる。

しかし最高以上はない。佐助は思う存分最高の機会を利用し尽くしてしまった。佐助の中の春琴はいつまでも美しく傲慢なままである。現実での春琴は美しさを失い、自信も失ってしまう。

「春琴の方は大分気が折れて来たのであったが、佐助はそう云う春琴を見るのが悲しかった、哀れな女気の毒な女としての春琴を考えることができなかつたと云う。(中略)佐助は現

実に眼を閉じ永却不変の観念境へ飛躍したのである。彼の視野には過去の記憶だけがある。もし春琴が災禍のため性格を変えてしまったとしたら、そう云う人間はもう春琴ではない。彼はどこまでも過去の驕慢な春琴を考える(中略)佐助は現実の春琴を以て観念の春琴を呼び起こす媒介としたのであるから対等な関係になることを避けて主従の関係の礼儀を守ったのみならず、前よりも一層己を卑下し、奉公の誠を蓋して少しでも早く春琴が不幸を忘れ去り、昔の自信を取り戻すように努め(後略)」佐助のマゾヒスト・ナルシストによる願望を満足させる媒介としてだけの春琴。美しさだけではなく、自信を失った哀しみさえも口にだすことはできず、佐助の中の春琴を演じなければならない。

記憶に春琴を留めた佐助にはもはや春琴は必要ではなく、本当に佐助を必要し、求め続けているのは春琴である。『春琴抄』を読んで男性に従わざるを得ない女人の孤独な哀しみを知った。

『豪華版日本現代文学全集 18 谷崎潤一郎 (一)』

谷崎潤一郎著、講談社、1981

(ながしまりさ・釧路校4年)